



## ヤロスラフ・トゥーマ (チェンバロ) Jaroslav Tuma - Cembalo



オランダ・ハーレム国際コンクール優勝、リンツ・ブルックナー国際コンクール第二位、ライプチヒ・バッハ国際コンクール第二位、ニュルンベルク国際コンクール第二位、プラハの春国際コンクール第三位入賞と最年少優秀賞受賞など12のコンクールを制覇、輝かしい経歴を持つ。ヨーロッパ各地、日本、アメリカ、カナダへコンサートツアーも毎年行い好評を博している。

オーケストラとの協演も数多く、チェコフィルの定期演奏会をはじめ、日本でも各地のオーケストラの定期演奏会に迎えられ絶賛を博す。CD録音は「ボヘミアの歴史的オルガン」シリーズI～VIの連続リリース、クラヴィコードによるバッハの平均律全集やゴールドベルク変奏曲、フォルテピアノによるハイドン「十字架上のキリストの最後の七つの言葉」など、鍵盤奏者として多彩な面を見せている。

ブラハ芸術アカデミーで後進の指導にあたる傍ら、各地の国際コンクールに審査員として招聘されるなど、ヨーロッパに於けるオルガン・チェンバロ界の「若き巨匠」と呼ばれるに相応しい地歩を固めている。

## 井上周子 (リュート) Chikako Inoue - Lute



東京音楽大学卒業後、フランスへ渡る。リヨン国立高等音楽院古楽科にてリュートおよび通奏低音をE. フェレ氏に師事、リュートの高等課程修了ディプロム取得。またヴィルウルバンス国立音楽学校にて古典鍵盤楽器をA. デュバル氏に師事、チェンバロおよび通奏低音の演奏家ディプロム取得。在仏中は、ナントのフォル・ジュルネ音楽祭をはじめ、ジュラやモンペリエ等での音楽祭に出演。帰国後は日本各地での演奏活動のほかに、ルネサンス・バロック音楽のセミナーも開催。また目白バ・ロック音楽祭、ながさき音楽祭等に出演。2007年にCD『melanges』をリリース、2009年に再版。2010年は2枚目のCD『sources』を、2011年には3枚目のCD『caprice』をリリース。

## 大嶋義実 (フルート) Yoshimi Oshima - Flute



ブラハ放送交響楽団首席、群馬交響楽団第一フルート奏者を経て、京都市立芸術大学・大学院教授。京都市芸大卒業後、ウィーン国立音大を最優秀を得て卒業。日本音楽コンクール、マリア・カナルス国際コンクール、日本管打楽器コンクール他に入賞入選。国内はもとよりロンドン、ウィーン、プラハ、フィレンツェ、ローマ等ヨーロッパ各地で毎年公演を行うほか、ブラハ交響楽団、スロヴァキア室内合奏団等、数多くのオーケストラと協演。日本人フルーティストとして初めて「プラハの春国際音楽祭」に出演する他、各地の音楽祭に出演。J. スーク、W. シュルツをはじめウィーンフィル、チェコフィル、ベルリン・ドイツオペラの首席奏者達と共演を重ね、その演奏は各国で度々放送されている。

2008年にリリースしたCD『モーツァルト・フルート四重奏曲全曲&協奏曲第1番』はヨーロッパの主要音楽誌上においていずれも最高票を獲得。仏ディアパソン誌上ではバユ、ゴールウェイ、ガロワらのものと比してなお「モーツァルト信奉者たちを統合するための全てを備えている」と賛辞を呈された。13枚のCDをリリース。2011年末に出版されたエッセイ集『音楽力が高まる17のなに?』も好評を博している。



### 使用チェンバロについて *Frantisek Vyhnalek - Cembalo*

16世紀から18世紀のルネサンス、バロック期にヨーロッパで栄えた鍵盤楽器。ピアノが弦をハンマーで叩くのに対し、チェンバロは弦を爪状の物で弾いて音を出す。その響きは繊細にして典雅、控えめで古風な色合をもちながらも、芯の通った表現を聞かせる。ソロ楽器としてはもちろん、フルートとのアンサンブルは何物にも変えがたい絶妙な音色の融合感を持ち、18世紀のヨーロッパの宮廷を彷彿とさせる響きをもつ。今回使用するチェンバロは、プラハ郊外にアトリエをもつ、F. ヴィフナーレク氏製作のジャーマンタイプ、ドイツ・アイゼナハのバッハ博物館(バッハの生家)に残る楽器の復元モデル。

